

日本の民俗学的国家形成へのアイルランドからの影響

イエイツ、ハーン、柳田

西村昌記

序論

本論は、19世紀末から20世紀初頭にかけてアイルランド文芸復興運動において芸術として受肉する民俗学的な文学性が、W. B. イェイツ(W. B. Yeats)からラフカディオ・ハーン(Patrick Lafcadio Hearn)を経て、日本の柳田國男に継承された系譜的因果関係に注目し、日本民俗学の源流へのアイルランドからの影響に光をあてる。イギリス民俗学が日本民俗学の成立に大きく貢献したとされる一方で、柳田がイギリス民俗学を実際に吸収したのは『遠野物語』の執筆後であることが高木昌史の調査から分かる(29)。これはイエイツらの文芸復興運動の根幹を成し、アイルランドの民話に残る断片的痕跡としての民族的記憶に基づいて国家形成を展開する思想である、民俗学的国家形成への柳田の共鳴を示唆する。本論ではこの日本民俗学へのアイルランドからの因果の本質を解明する文脈において、イエイツ、ハーン、柳田が共通してもつ「幽霊」への意識に込められた意味を辿ることで、イエイツの『ケルトの薄明』(*The Celtic Twilight*)と柳田の『遠野物語』を結ぶ類似性として既に語られてきた要因である、死生観と宗教的感性を具体的に紐解く。

1. 柳田のイエイツに纏わる言及とアイルランドからの影響

日本民俗学の父、柳田へのアイルランドからの影響を検討する上で、最初に高木昌史の調査内容を示す一

すでに『遠野物語』などを著していた柳田に、イギリスの民俗学協会と、その創始者であるゴムについて教えたのは南方熊楠だとされており、柳田は明治四十四年から四十五年にかけてゴムの著作を読み始めた。ゴムの著作はいわば柳田國男にとってイギリス民俗学への導入をはたし、柳田は、そこで改めて日本における民俗学の体系化をめざすことになる。蔵書中のイギリス民俗学の文献の中で、柳田が読了した日付の最も古いものが、ゴムの *Ethnography in Folklore* で、大正二年(一九一三年)に読み終えている。(29)

ここで重要なのはジョージ・ローレンス・ゴム(George Laurence Gomme)の著作が西暦の1911年から1912年に読まれた点と、柳田蔵書におけるイギリス民俗学に関する最も古い文献とされるゴムの書籍の読了記録は1913年であり、『遠野物語』刊行年の1910年よりも後である点である。日本民俗学の形成にイギリス民俗学からの影響がある一方で、その原点を成す『遠野物語』がその影響以前に書かれたことに加え、イエイツの『ケルトの薄明』との間に見られる類似は、イエイツから柳田への系譜的因果関係を暗示する。さらに柳田が『遠野物語』が刊行された1910年6月の同年わずか数か月前に、語り部の佐々木喜善宛てに送った書簡が『石神問答』に収録されている。そこでは柳田自身が、「先年 Yeats が *Celtic Twilight* を一讀せしこと有之候 愛蘭のフェアリーズにはザンキワラシに似たる者もありしかと存じ居候 遠野物語は早く清書して此夏迄には公にし度願に候へども」と述べている(174)。柳田が『遠野物語』ができる以前に『ケルトの薄明』を読み、完成目前にそのことを佐々木に語ったという事実は、イエイツから柳田への影響とアイルランドが日本民俗学の源流に与えた影響を考える上で一考に値する。

2. 『ケルトの薄明』と『遠野物語』を結ぶ類似性

牧野陽子はこの二作品の形式的類似に触れ、「土地の人から聞いた話を筆記、編纂するという構成や形もイエイツの『ケルトの薄明』と似ており、『遠野物語』はイエイツの『ケルトの薄明』に倣った部分があるとも十分考えられる」と言及する(64)。加えて、イーファ・アサンプタ・ハート(Aoife Assumpta Hart)も“*Tōno monogatari helped to establish a mixed genre that blended poetry, folklore, and cultural anthropology in the same manner as does The Celtic Twilight*”と主張する(282)。また小泉凡は『ラフカディオ・ハーンの民俗学的想像力とアイルランドのフォークロア』の中で、「ハーンがとりわけ共感した日本のフォークロアには、アイルランドに特徴的なフォークロアとの呼応が見出される」と述べ、アイルランドと日本の民話それ自体がもつ共鳴性に注目する(43)。彼はその上で『座敷わらしとバンシー—遠野とアイルランドを結ぶもの—』で、『遠野物語』と『ケルトの薄明』に通底する死生観に着目し、「柳田の『遠野物語』もイエイツの『ケルトの薄明』も、またラフカディオ・ハーンの怪談文学も、人間世界だけで完結しない世界観、自然・異界への畏怖の大切さ現代人に魅力

的に示唆してくれる書物である」と言う(138)。それから牧野も柳田とイエイツの関係性を論じながらハーンに触れ、「ハーンが日本の神社をどのように描いたか、チェンバレンやアストンの疑問に刺激されて、日本の神道の宗教的世界観をどう捉えたか、そこには実はケルトの面影があるということ」に言及する(69)。そして「その流れの上に、柳田國男の仕事をおくことができる」と指摘する(69)。だがこの宗教的感性の文脈から語った系譜的共鳴の正体と合わせて、この二作品が共有して持つ死生観を具体化するには、民俗学的国家形成を軸にアイルランドから日本民俗学への因果関係を語る必要がある。

3. 民俗学的国家形成の背後にある「幽霊」への意識

イエイツの民俗的な文学性が生まれた経緯にはイギリスの帝国主義支配からの精神的独立がある一方で、この文学と国家の関係性は日本でも国家存亡をかけた近代の超克の文脈で共有され、明治時代末期からその動向は強くなる。1890年(明治23年)に日本に降り立ったハーンは、西洋化によって失われていく日本の精神風土を、民話を引き込んだ再話文学を通して描き出していく。こうした民俗的国家形成の思想背景には、イエイツ、ハーン、柳田が共鳴する風景感覚としての「幽景」(“ghost-scape”)がある。これは「死者たちの記憶と結びついた風景」を意味し、木原謙一がハーンの言葉に基づき提唱する概念である。ハーンは著書 *Exotics and Retrospectives* で、“[t]he melancholy given by the sight of a beautiful landscape is certainly a melancholy of longing, — a sadness massive as vague, because made by the experience of millions of our dead”と述べる(214)。木原はその上で「イエイツとハーンはともにこのアイルランド人の土地感覚を強く意識していた」と言及し、「興味深いのはイエイツとハーンが共にアイルランドの風景感覚(幽景)と日本の風景感覚を結びつけたことだ」と主張する(103)。この風景感覚は『ケルトの薄明』と『遠野物語』に共通する「死生観」と「宗教的感性」を、より具体的に言語化し描写する要因として注目し値する。またそれを裏付ける柳田の幽霊意識が分かる“You showed me your ghosts and ancestors, so I’ll show you mine.”という引用がハートの同書内で登場する(283)。そこには柳田の、イエイツを意識した日本の幽霊の引き込みが象徴されている。そしてこの幽景の根底には、どこか民族意識を彷彿とさせるハーンが好んだ幽霊的存在(something ghostly)がある。彼は書籍 *Talks to Writers* で“...there is something ghostly in all great art, whether of literature, music, sculpture, or architecture”と主張する(130-31)。またイエイツも“sometimes I prefer the full wonder of Lafcadio Hearn’s ‘[t]here is something ghostly in all great art’”と述べ、この芸術の定義を気に入っていたことをレジナルド・ハイン(Reginald L. Hine)は指摘する(152)。以上の通り本論で扱った二作品を結ぶ類似の意味は、民俗学的国家形成の背後にある、イエイツ、ハーン、柳田を繋ぐ幽霊意識によって浮かび上がる。

結論

以上本論では、アイルランドからの日本民俗学への影響の因果的本質に注目し、イエイツの『ケルトの薄明』と柳田の『遠野物語』に共通する死生観と宗教的感性を紐解いた。その思想的背景にある民俗学的国家形成は、イエイツ、ハーン、柳田が共通してもつ「幽霊」への意識によって意味づけられる。

引用文献

- Hart, Aoife Assumpta. *Ancestral Recall: The Celtic Revival and Japanese Modernism*. McGill-Queen’s University Press, 2016.
- Hearn, Lafcadio. “Sadness in Beauty.” *Exotics and Retrospectives*, Little, Brown, 1898, pp. 211-217.
- . *Talks to Writers*. New York: Dodd, Mead and Company, 1920.
- Hine, Reginald L. *Confessions of an Un-Common Attorney*. London J. M. Dent & Sons, 1946.
- 木原, 謙一, 「W. B. イエイツ, 「盗まれた子ども」とアイルランド妖精譚—死者たちの記憶が呼び起こす風景」『越境する言葉 言語・文芸・文化研究を紐解く』, 吉村理一編, 花書院, 2025, pp. 89-111.
- 小泉, 凡, 「座敷わらしとバンシー—遠野とアイルランドを結ぶもの」、『地名と風土—人間と大地を結ぶ情報誌』, 13号, 2019.3.
- , 「ラフカディオ・ハーンの民俗学的想像力とアイルランドのフォークロア」、『エール: アイルランド研究』, 33号, 2014.3.
- 高木, 昌史, 『柳田國男とヨーロッパ—口承文芸の東西』, 三交社, 2006.
- 牧野, 陽子, 『ラフカディオ・ハーンと日本の近代—日本人の〈心〉をみつめて』, 新曜社, 2020.
- 柳田, 國男, 「書簡二四 柳田より佐々木へ」、『石神問答』, 創元社, 1941.